

流動続ける中国の内外情勢

体制固め急ぐ華国鋒体制

中 嶋 嶺 雄



華国鋒体制の中国は、国内の体制固めに全力を集中し、また「四つの現代化」を中心とする国内建設を一刻も早く本格化しなければならぬので、七六年の基調は内政中心主義にならざるを得ないだろう。

復活した「四つの現代化」路線

過去一〇年間の文化大革命とその「新生事物」なるものは、すべてが虚であったのだろうか。このような問いを生ぜしめずにはおかぬ衝撃的な北京政変から約三ヵ月が過ぎた。中国民衆からも党中央の幹部からも浮き上がっていた文革派上海グループが「四人組」として一網打尽にされてから、華国鋒新体制のもとでの中国は、「毛沢東以後」への歴史的な移行期を波乱含みで歩み始めている。

十月七日の北京政変以来、華国鋒指導部が初めての政治的宣言として発表した十月二十五日付「人民日報」「紅旗」「解放軍報」共同社説「偉

大な歴史的勝利」は、「四人組」の極悪非道の罪悪行為」を激しく糾弾し、毛沢東主席が華国鋒氏に對して、すでに去る四月三十日に「あなたがやれば、私は安心だ（爾亦事我放心）」と述べた旨を表明して、後継主席としての華国鋒氏の正統性を強調し、十月七日、つまり事件当日、「四人組」逮捕を代償にして初めて党中央がこの日に華国鋒氏の党主席および党中央軍事委員会主席就任を決定したことを明らかにしたのであった。

同時に、この共同社説は「今世紀中に農業、工業、国防、科学技術の現代化を全面的に実現し、わが国を社会主義の強国に築きあげ、人類により大きな貢献をし、最終的に共產主義を実現するために奮闘する」と最後に結んで、華国鋒指導部の

基本路線を、いわゆる「四つの現代化」（農業、工業、国防、科学技術の現代化）に求めたのであった。

いうまでもなく、「四つの現代化」は、故周恩来首相が七五年一月の第四期全国人民代表大会で再提起した方針であり、鄧小平副首相（当時）が周恩来首相の靈前で弔辞を読んだときに、この路線の実行を誓ったのであった。

しかし、「走資派」批判の過程で「四つの現代化」路線は激しく攻撃され、それゆえに四月四日の天安門事件当日、「反革命分子」たちは、「四つの現代化なりし日には、われら酒を供えて祭らん」（「四個現代化日、我們一定設酒重祭」）と謳ったのである。

しかし、はやくも「四つの現代化」路線が復活し、こうして路線的には、天安門事件当時の「反革命分子」がいまや勝利したことになる（天安門事件に際して民衆は周恩来首相の巨大な肖像に赤



第四期全人代常務委第三会議の議長を務める華国鋒主席

中国通信

い小瓶を糸でつるし、「小瓶」つまり「小平」^{シヤオピン}。鄧小平氏を意味したことを想い起こすとき、このような転換は鄧小平氏その人の勝利であるともいえない（な）。

華国鋒指導部の不安

では、華国鋒指導部は、明確に周恩来^{シヤオゼン}鄧小平路線を選択しているのかという、必ずしもその辺ははっきりしないところに問題が残されている。

「四つの現代化」が復活した一方で鄧小平批判のスローガンは、そのトーンが大分弱くなってきたとはいえ（鄧小平批判を深める）から「引き続き鄧小平を批判する」へ、「反革命修正主義路線」から単なる「修正主義路線」へ、依然として下ろされてはいる。

こうしたなかで、「四人組」批判のキャンペーンは、日を追って激しく、しかも具体的になってきており、江青夫人はついに、国民党が送り込んだ「紅色女郎」^{シヤオピン}（人民日報）十二月五日付）だと

され、「映画フィルムだけでもトラック一台分も運び込み、毎晩部屋にとじこもって輸入もののエロ・グロ映画にうつつを抜かした」（北京周報）七十六年第四六号）とされるに至っている。こうして、江青ら「四人組」がプロレタリアートの血を吸うブルジョア的な「吸血鬼」にされる一方、華国鋒主席こそ、「高邁な識見の持ち主であり、英明にして果敢であり、重大な原則問題では一貫して一歩も退いたことなく、辛抱強く落ち着いていながら、どこまでも闘争を続ける」（解放軍報）編集部「華国鋒同志をわが党の指導者たらしめたのは毛主席の英邁な決定」（人民日報）七十六年十一月九日付）人物として描かれている。

江青夫人ら「四人組」に対するこれほど悪しざまな罵言と華国鋒主席に対する急速な英雄視、このコントラストのなかで中国民衆が考えるのは、「四人組」がそれほどの悪人なら、なぜもっと早く彼らを処断しなかったのか、「紅色女郎」を妻とし、文化革命小組のリーダーとし、党中央政治局員にまでしたのは毛沢東主席その人ではなかったのか、華国鋒氏がそれほど卓越した人物であるのなら、なぜ劉少奇、林彪あるいは王洪文などに代わって、もっと以前に毛沢東後継者に指名されなかったのか、といった疑念ではなからうか。このような当然の疑念にさらされるを得ないところに、華国鋒指導部の深い不安が存するといえよう。

広州市内に見られる四人組批判の立て看板



華国鋒体制の形成いまだし

確かに、今回の華国鋒指導部の出現は電撃的であった。そして華国鋒主席を中心に、汪東興、吳德、陳錫聯、蘇振華、倪志福の諸氏らの「新実権派」が李先念、葉劍英氏らのいわゆる実務派グループと新しい連携 (coalition) を形成している。

こうしたなかで当面「四人組」を打倒した華国鋒主席への支持のナダレ現象は持続しており、とくに人民解放軍がこの間一貫して華国鋒主席の措置を支持しているのは、華国鋒指導部にとって力強いことである。「解放軍報」は「確固とした立場で、旗幟を鮮明にし、この偉大な闘争に積極的に

身を投じなければならぬ」(「解放軍報」編集部「すべての行動は華主席をはじめとする党中央の指揮に従おう」、「人民日報」七六年十一月二十三日付)と述べている。

だが、このようなバックアップにもかかわらず華国鋒指導部は、依然として党中央委員会総会、

さらには党大会のような制度的・組織的保証によって承認されていない

のである。もとより、このような制度的・組織的なエンドースメント(裏付け)は、中国のこれまでの政治過程においてまれであり、憲法や党規約の約束は常に空文化してすべては現実の力関係によって推移してきたのであるが、だとすれば、今回の「四人組」追放によっても、中国内政のそのような悪循環は断ち切れていないのであり、その意味で今回の北京政変は林彪異変と同じパターンの繰り返しだともいえるのである。したがって、華国鋒指導部自身、いつ力によって打倒されるかもしれないという不安のなかに自己を位置づけねばならないであろう。さらに、一九七三年夏の十全大会体制発足当時九人だった党中央政治局常務

委員は今日二人のみになっており(華国鋒と葉劍英の両氏)、これではいかに「党中央」といおうとも、このような「党中央」では政策決定機能を果たし得ないであろう。

壁新聞がはやくから伝えていた李先念副首相の首相(國務院)就任、葉劍英・党副主席の中央軍事委員会主席就任あるいは陳錫聯・北京軍区司令(党中央政治局委員)の国防相就任といった一連の新任人事が依然として未確認であることも、新指導部の安定性を問うことになる。

鄧小平の影

こうした状況において、去る十一月末に開催された全国人民代表大会常務委員会(第四期第三回)は周恩来未亡人・鄧穎超女史を常務委員会副委員長に任命し、同時に「四人組」に連座したカドで喬冠華外相を解任して、後任に黃華・国連大使を任命した。しかし、この措置は全人大常務委という性格からしても、大勢いる同委副委員長というポスト(七五年一月の第四期全人大体制発足当時、副委員長は実に二人の多勢にのぼっていた)からしても、亡き周恩来首相を敬慕する大衆の意思を華国鋒指導部へ導入するものとして、また七五年五月の天津における外交講話に示されたように、周恩来首相が矢面に立ちはじめから急きよ「四人組」に接近した周恩來の「生徒」喬冠華をぜひとも急ぎ解任するためのものであったと

思われ、華国鋒指導部の揺るぎなき形成と安定を示すものではない。

そうしたなかで、福建省、広東省、湖北省などの地方では「四人組」の影響下に「反乱」や「抵抗」もみられるとの情報がつづけに届いており、とくに武漢や福州での流血の混乱に対しては軍が出動して対処しているとの報道もあつて（十一月二十四日付英紙「ガーディアン」、同十一日付米紙「ワシントン・ポスト」など）一部地方の状況はきわめて流動的であるようだ。これまでの文革派支配時代の経過を考えれば、このような混乱が生じたとしても、また当然だといえよう。

こうして見てくると、華国鋒指導部としては一九七七年の早い時期に、はたして党中央委員会なり党大会なりを開催し得るかどうかが、場合によっては全国人民代表大会を開催し得るかどうかが当面の課題であり、一方、一部に伝えられている内

の混乱を鎮静できるかどうかが根本に重要な課題であろう。これらの状況の底流には同時に、この間、一貫して存在し続けてきている「鄧小平の影」の問題があるのであり、この「影」をどのように実在化し得るかにかについても注目せねばならない。なぜなら、今日の中国において鄧小平問題は、その再復活があり得るかどうかがというよりも、その再復活をあえて行うべきかどうかの選択権さえ、鄧小平自身が握っているのではないかとと思われるような問題になっていると私は考えるからである。

中国外交の行方

北京政変後も中国は七六年十月十七日に地下核実験を行い、十二月七日には七番目の人工衛星を打ち上げて、国際政治や世界戦略に関しては、既定の方向を踏襲しつつ重要な布石はそれなりに打

ちつつあるかのように思われる。しかし、中国の地下核実験や人工衛星打ち上げがもはややさしたるニュースにもならないほど、中国それ自身がもつ対外的なマヌーバビリティ（戦略・戦術的な力量）は、今回の北京政変と毛・周両巨頭の不在によって低下してしまったといわざるを得ない。

だが、こうして中国の実像が見えてきたことによって、逆にその中国を自己の陣営に引き入れようとする米ソの競合はますます激化しつつあるといえよう。「毛沢東以後」への大きな期待をつないできたソ連は、単に毛沢東の死のみならず、引き続き起こった北京政変によって「毛沢東一派」ないしは「毛沢東集團」が一挙に失墜したのであるから、いまや事態は基本的に好転したとの認識に立つて、あらゆる方法で対中接近を試みようとしている。この問題について私は、すでに本誌で論じたばかりであるので（拙稿「対立から和解へ

下山事件全研究

元松川事件被告が十年余、執念で追求した問題作

佐藤一

●2500円
A5箱入 250円

生活の一切を投げうち、裁判化学の実験を日々追試、生き残りの関係者の証言をとり、警視庁、新聞社に秘められていた資料を駆使して、冷徹な科学的分析を重ねた結果、ついに明らかにされた真相がこれだ！

中央公論12月号で紹介され大反響！

幼くして廓に売られた沖縄女が、流転のすえに「八月十五夜の茶屋」の女将になるまでの自らの情熱的な生きざまと、辻の辿った道を描く。

辻の華

上原栄子

●980円
四六判 200円

時事通信社

東京・千代田・日比谷公園1-3
03(591)1111 振替東京4-23884

—北京政変後の中ソ関係、本誌七六年十一月二十三日号)、ここでは深く立ち入らないが、この一年間ぐらいのうちに、中ソ関係はかなり流動化するであろうし、また、北京とハノイの関係、北京と日本共産党の関係などの改善の可能性を含めて、国際共産主義運動がある種の復元力を示すようになることも考えられよう。

しかし、今回のソ連の対中接近に際しても、ソ連側の御用ジャーナリスト、ビクター・ルイスが去る十月十四日にロンドンとバリの西側の新聞を利用して、「中国の新指導部」がここ「一カ月のうちに」ソ連との「共通の言葉」を見いださないかぎり、ソ連指導部が「不退転の決断」を下すのを防止できないであろうと述べ、あからさまな対中脅嚇を行っていた経緯を無視できないであろう(なお、この点については米紙「ワシントン・スター」十月十九日付ヘンリー・S・ブラッドシャー記者の論説および「インタナショナル・ヘラルド・トリビューン」紙十一月四日付ビクター・ゾ

ルザ記者の論説、参照)。

このようなソ連の態度は、中ソ和解へのソ連の期待が裏切られたとき、ソ連はこれまで以上に強い姿勢で対中戦略を実行するであろうことを含意したものであり、それだけに、アメリカとしても強く警戒せざるを得ないのである。ビクター・ルイス記者のブラフ(脅かし)に対して、キッシンジャー米國務長官が十月十五日夜のハーバード大学での記者会見で、極めて強い対抗的姿勢を示したのはそのためであった。アメリカはこうして、華国鋒指導部を中ソ和解へと追いやらないためにも、対中接近を促進するであろうし、場合によっては、米中軍事提携への道へと中国を誘うであろう。このことは、中国の軍部にどのような反応を生ぜしめるであろうか。中国の軍部には一定限度の対ソ和解を求める動きが潜在してきたと思われるだけに大いに注目すべきところである。今日、表面には出ていないが、五〇年代中ごろの粟裕総参謀長も、林彪の「人民戦争論」と対立した六〇



鄧 小 平



黄 華

年代中ごろの羅瑞卿総参謀長とともに軍内部ですでに復権していることを忘れてはならない。ここに見られるように、中国をめぐる国際環境は、はやくも大きく流動化しつつある。しかし、当の中国はすでに見たように当面、北京政変後の国内の体制固めに全力を集中せねばならず、また「四つの現代化」を中心とする国内建設を一刻も早く本格化しなければならないので、七六年の基調は当然、内政中心主義にならざるを得まい。いわゆる「第三世界」との関係や日中関係についても、この大ワクから抜け得ないであろうし、場合によっては七六年中に懸案の米中国交樹立が実現したとしても、台湾に対しては現状維持政策をとる以外に道はないであろう。やはり中国内政の推移が決定的な力になりそうである。

(なかじま・みねお 東京外国語大学助教授)

週刊時事

●異色野心作スタート
藤本義一の
海外旅行・見ると聞くと聞くのは……

懸け取り万歳か宝船まで
ちねんじ

新特大号
特価150円
時事通信社

集
総まとめ
★ユーモアと羞恥のミックス
★★★解説文学博士吉田精一★★★

特
めてたさ抜群ノ落語の正月
フランス文学者
田辺貞之助

書店・国鉄売店で発売中!

世界週報

新年特大号 1977

(12/28・1/4合併号)

大正9年10月9日 第3種郵便物認可
昭和29年2月19日国鉄東局特別換承認雑誌
第2736号 第58巻 第1号 通巻第2772号
昭和52年1月1日発行(毎週大曜日発行)

時事通信社

特集 世界展望1977年

稲葉秀三／竹内一郎／久住忠男
藤島泰輔／中嶋嶺雄／宮内邦子
玉城 素／佐瀬昌盛

人間ドキュメント

ジャパニーズ・アメリカン

ダニエル・K・イノウエ物語

牛島秀彦

●カラー 南太平洋—“最後の樂園”このごろ

専用船に積み込まれる日本車



日米欧貿易戦争を斬る
座談会 細見卓／大森増一／河野力
特派員 富くじ 繁盛記
特報告